

釜山—多彩な顔の都市

釜山は世界第5位の港がある韓国の第2の都市でありながら、夏には総計4500万人以上が訪れる代表的な休養地である。また、毎秋にはアジア最大映画祭「BIFF」が開催される。このような釜山は、大都市としての都会のイメージと海とを思い出させる都市だ。



[写真1、2] 釜山新港湾、海雲台（韓国最大の海水浴場） [出典：韓国郷土文化電子大典]



[写真3、4] 映画の殿堂（BIFF専用館）、釜山の夜景

[出典：韓国郷土文化電子大典、<http://blog.naver.com/dj2600/30137743455>]

釜山は歴史的に1950年代の韓国戦争の避難地だったので、その時期に避難民が居住するために山の奥まで数多くの建物が建てられた。そのため、釜山では山の中腹まで建物が建てられている風景をしょっちゅう見かける。

山の中腹にある町は大体立ち遅れた町で、再開発などによって高層マンションに建て替えられるところが多いが、様々な理由でそうでないところも多い。

その中、甘川文化町（カムチョン・ムンファ・マウル）は再開発ではなく、住民と文化・芸術専門家の参加により、町の歴史性と文化芸術的価値、及び地域の特性を生かした成功的な都市再生として名が高い。

甘川町は1950年代に韓国戦争の避難民と太極道教徒で作られた町だ。山の斜面に階段式に町

が形成され、建物は多彩な色で外観を彩られていて独特の景観を持っている。独特の色使いから「韓国のサントリーニ」又は「韓国のチンクエ・テッレ」と呼ばれる。また、狭い路地の周りに小さな四角の建物が密集しているのが、レゴを重ねているようで「レゴ町」とも呼ばれる。

2009年に「夢を見る釜山のマチュピチュ」という公共美術プロジェクトで、町の空き地と建物の壁に新しい造形物を設置して、壁画を描いた。2010年には「ミロミロ（美路迷路）路地プロジェクト」が続き、環境の整備や壁画事業がさらに行った。続いた公共美術事業で芸術作家と住民が共に「文化町」について深く考えるようになった。それにつれ、「文化町運営協議会」が設立され文化町づくりが続いている。最近は空き家を芸術創作室又はギャラリーに改造したり、ブックカフェ、レストラン、宿泊施設ができたりして、文化芸術村が造成されている。このように続いた公共美術プロジェクトと住民の参加を通じて、甘川町は立ち遅れた地域のイメージを抜け、異国的色風景を持つ、昔ながらの路地歩きが楽しめる芸術的町として名を立てている。



[写真5] 甘川文化町の全景 [出典：Wikimedia]



[写真6、7] 甘川文化町の造形物及び壁画 [出典：<http://blog.daum.net/redactor/385>]



[写真8] 甘川文化町の路地

[出典 : http://blog.daum.net/_blog/BlogTypeView.do?blogid=0E1ji&articleno=11264489
Wikimedia]